

芦屋大学論叢 第83号
(令和7年3月21日)抜刷

大学女子バレーボール選手の心理的競技能力

ー兵庫県内の大学トップレベルの選手を対象としてー

青 木 敦 英
足 立 学
番 平 守

大学女子バレーボール選手の心理的競技能力 ー兵庫県内の大学トップレベルの選手を対象としてー

青 木 敦 英 (1)

足 立 学 (2)

番 平 守 (3)

(1) 芦屋大学臨床教育学部教授

(2) 園田学園女子大学人間健康学部准教授

(3) 芦屋大学臨床教育学部客員教授

1. はじめに

バレーボールの競技力を高めるためには、体力や技能の向上だけでなく、強い精神力を養うことが求められる。実際の試合では、勝敗への不安や周囲の期待に答えなければならないなどの精神的プレッシャーを感じ、平常心で相手との試合に挑むことが困難になることも多々みられる。例えば、ゲーム終盤に入るとミスを恐れるがあまりにいつも通りのサーブやスパイクが打てなかったり、ディフェンスの場面では強打を意識しすぎて足が動かず軟打が拾えないことや、時には気負いすぎてスパイクをアウトボールにしたりする場面もある。また、一度のミスから萎縮して連続ミスに繋がったり、スパイカーがブロックされるなど対戦相手（相手の強弱やリーグ戦の状況など）によって戦う気持ち（モチベーション）が異なったりするなど、バレーボール選手にとって心理的な面で勝敗を左右することは言うまでもない。

ところでスポーツ選手のメンタルや心理状態を推測する方法として、徳永と橋本（2000）は心理的競技能力調査（Diagnostic Inventory of Psychological-Competitive Ability for Athletes：以下、DIPCA.3）を開発した。この調査ではアスリートが競技場面で必要とする精神力を「心理的競技能力」と定義し、それを5つの因子と12の尺度からとらえて評価をし、スポーツ選手の心理面を把握し支援をする目的で作成された。これまでにこのDIPCA.3を用いて様々なスポーツ選手の心理的競技能力が調査されている。大学生アスリートを対象とした調査においては、大学ラグビー選手を対象において所属するチームのレベルが高いほど心理的競技能力が優れていることや、大学サッカー選手において県大会出場経験などの経験が多い選手が少ない選手よりも心理的競技能力が高い傾向であることが報告されている（高津ほか，1988；西村と下園，2002）。またバレーボール競技についてみると大学生男女バレーボール選手では心理的競技能力に男女差がみられたこと、さらに9人制バレーボールの国体候補選手ではレギュラー選手の方が非レギュラーよりも高い心理的競技能力を示したことが報告されている（西野，2010；西野，2012）。しかし大学バレーボール選手の心理的競技能力については明らかになっていない点も多く、とくに同じカテゴリー内（リーグ）や、複数の競技レベルの異なるチームの心理的競技能力を直接比較された研究は見当たらない。また大学女子バレーボール選手においても、全国大会規模の経験や大きな大会への出場経験が心理的競技レベルに影響することが考えられるが、この点についても明らかになっていない。

そこで本研究は兵庫県に所在する複数の大学女子バレーボールチームを対象にDIPCA.3を実施し、大学女子バレーボール選手の競技レベルと心理的競技能力との関係、さらに大きな大会の経験と心理的競技能力との関係について明らかにすることで、今後の大学女子バレーボール選手の指導や強化に関する効果的な知見を得ることを本研究の目的とした。

2. 方法

2.1 対象

本研究は兵庫県内にある関西大学バレーボール連盟 1 部および 2 部に所属する大学の女子選手を対象とした。対象としたチームは 3 チームで詳細は下記のとおりである。

- ・2022 年度兵庫県大学選抜チーム（マルイチ兵庫選抜）メンバー（以下選抜） 18 名
- ・2022 年度関西大学バレーボール連盟 1 部所属 S 大学（以下 S 大学） 27 名
- ・2022 年度関西大学バレーボール連盟 2 部所属 A 大学（以下 A 大学） 24 名

上記の計 3 チーム、述べ対象者 69 名であった。なお選抜チーム内には S 大学（4 名）および A 大学（3 名）の選手 7 名が含まれている。兵庫県大学選抜選手の選考基準は、関西大学バレーボール連盟 1・2 部の兵庫県内大学選手を対象とし、各ポジション兵庫県内で最も優秀である選手で構成されている。

また本研究ではレギュラー選手の定義として、2022 年秋季リーグ戦の試合のうち 5 試合以上出場した選手をレギュラー選手と定義した。試合の出場については、関西大学バレーボール連盟公式ホームページ (<https://www.kansai-uvf.net/>) のリーグ戦の試合帳票を参照した。その結果、選抜 14 名、S 大学 11 名、A 大学 14 名をレギュラー選手とした。

2.2 調査内容の詳細

調査時期は関西大学バレーボール連盟秋季リーグ戦期間中の 2022 年 10 月上旬に行った。調査に当たって所属チーム監督に調査内容と本研究の趣旨ならびに個人情報の保護について紙面にて説明を行うとともに、選手に対しても同様に説明を行い本調査の同意を得られた対象者について調査を行った。

表 1 DIPCA.3 の調査内容（因子および尺度）

因子	尺度	内容
競技意欲	忍耐力	我慢強さ、粘り強さ、苦痛に耐える
	闘争心	大試合や大事な試合での闘志やファイト、燃える
	自己実現意欲	可能性への挑戦、主体性、自主性
	勝利意欲	勝ちたい気持ち、勝利重視、負けず嫌い
精神の安定・集中	自己コントロール能力	自己管理、いつものプレー、身体的緊張のないこと、気持ちの切り替え
	リラックス能力	不安、プレッシャー、緊張のない精神的なリラックス
	集中力	落ち着き、冷静さ、注意への集中
自信	自信	能力、実力発揮、目標達成への自信
	決断力	思いきり、素早い決断、失敗を恐れない決断
作戦能力	予測力	作戦的の中、作戦の切り替え、勝つための作戦
	判断力	的確な判断、冷静な判断、素早い判断
協調性	協調性	チームワーク、団結心、協力、励まし
	Lie Scale	検査結果の信頼性

本研究で用いた DIPCA.3 は徳永（2015）が開発したスポーツ選手に必要な試合場面での心理的能力を測る検査である。内容は 48 の質問項目と検査の信頼性をみる 4 項目の合計 52 の質問項目から構成されている。表 1 に DIPCA.3 の概要を示した。

また全国レベル大会（全国中学校大会、インターハイ、インカレなど）の経験について①全国レベルでの経験なし、②全国レベルの経験が1～2回、③全国レベルの経験が3～4回、④全国レベルの経験が5回以上に分類し、アンケートを集計した。

2.3 分析方法

本研究ではDIPCA.3によって得られた5因子、総合得点および12尺度について、全国レベル大会での経験および競技レベルの違いについて分析を行った。DIPCA.3と全国レベル大会での経験については、すべての対象選手について全国レベル大会の経験について4分類（①全国レベルでの経験なし、②全国レベルの経験が1～2回、③全国レベルの経験が3～4回、④全国レベルの経験が5回以上）し、DIPCA.3の平均値を算出し、一元配置分散分析を用いて統計的に比較を試みた。また、競技レベルとDIPCA.3については、レギュラー選手を対象としてチーム内で平均値を算出し、一元配置分散分析を用いて統計的に比較を試みた。一元配置分散分析の結果、F値が有意であれば、多重比較検定（Turkey法）を用いて競技レベル間の比較を実施した。なお、本研究ではいずれの検定も有意水準は5%とし、統計解析ソフトとしてIBM SPSSver 22.0を使用した。

3. 結果

3.1 全国レベルの経験とDIPCA.3

表2 全国レベルの経験回数比較

		①なし	②1～2回	③3～4回	④5回以上
選抜	度数	1	3	4	8
	割合（%）	6.3	18.8	25.0	50.0
S大学	度数	3	5	11	8
	割合（%）	11.1	18.5	40.7	29.6
A大学	度数	6	7	3	8
	割合（%）	25.0	29.2	12.5	33.3
合計	度数	10	15	18	24
	割合（%）	14.9	22.4	26.9	35.8

表2は全国レベル大会（全国中学校大会、インターハイ、インカレなど）の経験について①全国レベルでの経験なし、②全国レベルの経験が1～2回、③全国レベルの経験が3～4回、④全国レベルの経験が5回以上の4つに分類し、チームごとの分布を示したものである。選抜チームは全国レベルの大会の経験が5回以上の選手が50%おり、他のチームと比較して最も全国大会を経験している選手の割合が多くなっていた。

表3 全国レベルの経験と尺度の比較

尺度	全国レベルの経験について				分散分析	
	①なし	②1～2回	③3～4回	④5回以上	F値	多重比較検定
忍耐力	16.10 ± 2.69	13.92 ± 3.20	14.88 ± 3.04	15.79 ± 2.42	1.562	
闘争心	17.10 ± 2.03	15.69 ± 3.92	17.35 ± 2.62	18.11 ± 2.23	1.984	
自己実現意欲	17.80 ± 1.62	14.31 ± 3.71	15.59 ± 3.02	16.42 ± 2.22	3.281 *	①>②
勝留意欲	18.20 ± 1.40	14.15 ± 3.18	15.53 ± 2.50	17.11 ± 2.08	6.796 **	①>②、②<④
自己コントロール能力	14.80 ± 2.57	15.85 ± 3.87	14.29 ± 3.27	14.16 ± 3.66	0.719	
リラクセス能力	12.90 ± 4.53	14.85 ± 4.72	12.41 ± 4.30	14.53 ± 3.76	1.181	
集中力	15.20 ± 1.93	15.85 ± 4.22	15.59 ± 2.35	15.84 ± 3.08	0.119	
自信	10.30 ± 2.00	11.00 ± 3.72	10.88 ± 3.35	12.89 ± 2.75	2.160	
決断力	11.90 ± 2.33	11.85 ± 3.96	11.88 ± 3.16	13.63 ± 3.17	1.264	
予測力	11.30 ± 2.16	12.15 ± 3.51	12.59 ± 2.85	13.47 ± 2.72	1.373	
判断力	10.20 ± 2.44	11.31 ± 3.17	11.59 ± 2.43	13.58 ± 2.80	3.971 *	①<④
協調性	17.50 ± 2.72	16.15 ± 2.51	18.06 ± 2.54	18.32 ± 1.80	2.452	

平均値±標準偏差、**：p<0.01、*：p<0.05

全国レベルの経験が DIPCA.3 にどのように影響を及ぼしているのかを探るために、表3は全てのチームを対象として、DIPCA.3の尺度ごとに全国レベルの大会の経験について比較を行った結果である。その結果、「自己実現意欲」(p<0.05)「勝留意欲」(p<0.01)「判断力」(p<0.05)の3項目で統計的に有意な差がみられた。また多重比較検定の結果、「自己実現意欲」および「勝留意欲」では全国レベルの経験が「①なし」が「②1～2回」よりも有意に高い値となっていた。また「勝留意欲」では全国レベルの経験が「②1～2回」より「④5回以上」が有意に高い値となっていた。さらに「判断力」では全国レベルの経験が「①なし」が「④5回以上」が有意に高い値となっていた。

表4 全国レベルの経験と因子および総合得点の比較

因子	全国レベルの経験について				分散分析	
	①なし	②1～2回	③3～4回	④5回以上	F値	多重比較検定
競技意欲	69.20 ± 6.22	58.08 ± 12.71	63.35 ± 8.94	67.42 ± 7.05	3.870 *	①>②、②<④
精神の安定・集中	42.90 ± 8.35	46.54 ± 12.58	42.29 ± 9.45	44.53 ± 9.66	0.489	
自信	22.20 ± 3.85	22.85 ± 7.54	22.76 ± 6.31	26.53 ± 5.52	1.798	
作戦能力	21.50 ± 4.30	23.46 ± 6.45	24.18 ± 5.00	27.05 ± 5.16	2.724	
協調性	17.50 ± 2.72	16.15 ± 2.51	18.06 ± 2.54	18.32 ± 1.80	2.452	
総合	173.30 ± 14.48	167.08 ± 30.49	170.65 ± 21.60	183.84 ± 21.66	1.673	

平均値±標準偏差、*：p<0.05

表4は全てのチームを対象として、全国レベルの大会の経験と DIPCA.3 の因子および総合得点について比較を行った結果である。その結果、「競技意欲」(p<0.05)において統計的に有意な差がみられた。また多重比較検定の結果、全国レベルの経験が「①なし」が「②1～2回」よりも有意に高い値を示し、さらに全国レベルの経験が「②1～2回」が「④5回以上」よりも有意に高い値を示した。

3.2 競技レベルと DIPCA.3

競技レベルによって DIPCA.3 が異なっているのかを確認するために、対象となった 3 チームのレギュラー選手を対象として比較を行った。なお本研究では競技レベルの比較をするにあたって、チームで所属するリーグ等を勘案して競技レベルとし、選抜チーム＞S 大学（関西学生 1 部リーグ所属）＞A 大学（関西学生 2 部リーグ所属）の順で競技レベルを解釈した。

表 5 チームごとの尺度の比較

尺度	選抜	S大学	A大学	分散分析	
				F値	多重比較
忍耐力	15.1 ± 2.4	14.7 ± 2.5	16.5 ± 2.3	2.015	
闘争心	18.3 ± 1.9	17.8 ± 2.3	17.9 ± 2.4	0.187	
自己実現意欲	15.7 ± 2.8	16.6 ± 2.4	16.3 ± 2.4	0.418	
勝利意欲	16.5 ± 2.7	17.1 ± 2.2	17.1 ± 2.3	0.291	
自己コントロール能力	15.1 ± 2.4	12.6 ± 3.1	15.1 ± 3.5	2.887	
リラックス能力	15.4 ± 2.7	11.5 ± 3.6	14.5 ± 4.1	4.096 *	選抜＞S大学
集中力	16.7 ± 2.7	14.0 ± 3.1	16.6 ± 2.3	3.955 *	選抜＞S大学、S大学＜A大学
自信	13.4 ± 2.2	11.6 ± 1.7	13.2 ± 3.2	2.060	
決断力	14.9 ± 2.2	11.7 ± 1.8	14.3 ± 3.1	5.648 **	選抜＞S大学、S大学＜A大学
予測力	13.8 ± 2.3	11.7 ± 1.7	14.0 ± 2.7	3.457 *	
判断力	13.2 ± 2.6	11.1 ± 2.2	13.9 ± 2.8	3.975 *	選抜＞S大学
協調性	17.6 ± 2.5	17.6 ± 2.2	18.9 ± 1.3	1.767	

平均値 ± 標準偏差、** : p<0.01, * : p<0.05

表 5 は 3 チームのレギュラー選手を対象として、DIPCA.3 の尺度について比較を行った結果である。その結果、「リラックス能力」(p<0.05)「集中力」(p<0.05)「決断力」(p<0.01)「予測力」(p<0.05)「判断力」(p<0.05)において統計的に有意な差がみられた。また多重比較検定の結果、「リラックス能力」および「判断力」では選抜が S 大学よりも有意に高い値を示し、「集中力」、「決断力」選抜が S 大学よりも有意に高い値を示し、A 大学も S 大学よりも有意に高い値を示した。

表 6 は 3 チームのレギュラー選手を対象として、DIPCA.3 の因子および総合得点について比較を行った結果である。その結果、「精神の安定・集中」(p<0.05)「自信」(p<0.05)「作戦能力」(p<0.05)「総合得点」(p<0.05)において統計的に有意な差がみられた。また多重比較検定の結果、「精神の安定・集中」および「総合得点」では選抜が S 大学よりも有意に高い値を示し、A 大学も S 大学よりも有意に高い値を示した。「自信」では選抜が S 大学よりも有意に高い値を示した。「作戦能力」では A 大学も S 大学よりも有意に高い値を示した。

表6 チームごとの因子および総合得点の比較

因子	選抜		S大学		A大学		分散分析	
							F値	多重比較
競技意欲	65.6 ± 7.9	66.3 ± 7.9	67.8 ± 7.9				0.283	
精神の安定・集中	47.2 ± 7.1	38.0 ± 8.5	46.2 ± 9.1				4.435 *	選抜>S大学、S大学<A大学
自信	28.4 ± 4.2	23.3 ± 3.3	27.5 ± 5.7				4.150 *	選抜>S大学
作戦能力	27.0 ± 4.7	22.8 ± 3.5	27.9 ± 5.2				4.200 *	S大学<A大学
協調性	17.6 ± 2.5	17.6 ± 2.2	18.9 ± 1.3				1.767	
総合	185.7 ± 16.2	167.9 ± 17.0	188.3 ± 20.3				4.511 *	選抜>S大学、S大学<A大学

平均値±標準偏差、**：p<0.01，*：p<0.05

4. 考察

本研究は、兵庫県に所在する複数の競技レベルの異なる大学女子バレーボールチームを対象としてDIPCA.3を実施し、大学女子バレーボール選手の心理的競技能力について明らかにすることである。とくに全国レベルの大会の経験が心理的競技能力にどのように影響しているのか、また、大学リーグ内での競技レベルが異なることで心理的競技能力にどのような違いが現れるのかについて分析を行った。

4.1 全国レベルの経験とDIPCA.3

心理的競技能力は全国レベルの大会や公式戦などの試合経験が影響していると考えられているが、本研究の結果、全国レベルの経験と関係があったDIPCA.3の尺度は「自己実現意欲」、「勝留意欲」および「判断力」で、因子では「競技意欲」のみに有意な差が認められた。先行研究においては、実業団から高校生までの女子ハンドボール選手を対象に心理的競技能力(DIPCA.2)と全国大会の経験について調査をされた研究では、全国大会への経験が豊富な選手ほど「勝留意欲」、「自信」、「決断力」、「予測力」、「判断力」などの多くの尺度や因子で有意に高くなっていることを報告している(檜塚ほか, 2001)。また西野(2010)は男子9人制バレーボールの国体候補選手を対象としてDIPCA.3を実施したところ、全国大会出場経験が5回以上の選手とそれ以下の選手では尺度において「忍耐力」、「自信」および「協調性」で、因子においては「自信」と「協調性」について全国大会出場経験が5回以上の選手が有意に高い得点であったことを報告している。

先行研究と本研究の結果を照らし合わせると、本研究では全国大会出場経験が多い選手のDIPCA.3の特徴として、限られた尺度や因子のみで高い傾向にあったが、先行研究では比較的多くの尺度や因子に違いが報告されている。この要因としては本研究で対象とした選手の競技レベルやカテゴリーに大きな違いがなかったことが考えられる。一方で、差が認められた因子や尺度についても先行研究とは異なる結果となっていた。心理的競技能力のスポーツ種目差については、ネット型(バレーボール、テニス、卓球など)は、相対的に「自信」や「作戦能力」に優れており、野球型では「協調性」が優れ、個人対人型(柔道、剣道、空手など)や個人記録型(陸上競技、水泳など)の個人型競技は「自己実現意欲」が優れている傾向にあるとされており、種目差があることが知られている(徳永ほか, 2000)。しかし、本研究の結果は、女子ハンドボール選

手を対象とした報告と比較的近い結果を示しており、男子9人制バレーボール選手の心理的競技能力とは異なっており、種目の特徴というよりは女子選手の特徴が現れているのかもしれない。この点について探してみると、大学ラグビー選手の心理的競技能力の性差についてDIPCA.3を用いて調査された報告では、女子選手の方が男子選手と比べて「忍耐力」、「協調性」、「協調性」が有意に高くなっており、これらの心理的競技能力が女子選手の特徴である可能性を示唆している（田沼と米地，2016）。しかし本研究では女子バレーボール選手のみを対象としたため、男子選手との比較はできないため女子選手の特徴かどうかについては断定できない。今後この点については男子選手を対象として明らかにしていきたい。

4.2 競技レベルとDIPCA.3

本研究では大学女子バレーボール選手の競技レベルと心理的競技能力との関係について、リーグ戦に出場をしているレギュラー選手を対象として比較を試みた。なお本研究では競技レベルの比較をするにあたって、チームで所属するリーグを競技レベルとし、選抜チーム>S大学（関西学生1部リーグ所属）>A大学（関西学生2部リーグ所属）の順で競技レベルを解釈した。その結果、選抜に所属する選手の心理的競技能力はS大学と比べて明らかに高い項目が散見され、A大学とS大学との比較においてはいくつかの項目でAと大学の方が高い心理的競技能力を示し、必ずしも競技レベルで心理的競技能力が一致していなかった。本研究でレギュラー選手を比較した理由は、これまでの研究において心理的競技能力については競技力と深く関わっており、とくに競技力との関係においてレギュラー選手と非レギュラー選手で比較した結果、レギュラー選手の心理的競技能力が高いことが多くの種目で報告がなされている（本間，2009；鄭ほか，2015）。よって本研究において競技レベルで心理的競技能力を比較する際にはレギュラー選手を対象とした。

これまでに競技レベルによって心理的競技能力が異なっていることは、多くの種目において報告がなされている。徳永ほか（2000）はバレーボール、バスケットボール、スケートなどの選手について国際レベルの選手を含む様々な競技レベルの選手を対象としてDIPCA.3を用いて心理的競技能力を比較したところ、国際レベルの選手の心理的競技能力が最も高く、競技レベルによって心理的競技能力に差がみられたことを報告している。バレーボール競技においては女子バレーボール選手の全日本選手、実業団選手、大学生選手、高校生選手を対象としてDIPCA.3を用いて心理的競技能力の比較をしたところ、尺度では「自己コントロール」「自信」「決断力」「予測力」「判断力」で、因子では「作戦能力」「自信」で有意な差が認められ、いずれも全日本>実業団>大学生>高校生の順序で高得点を示していた（徳永ほか，2000）。

本研究では競技レベルが最も高いと考えられた選抜の選手の心理的競技能力が最も高かったものの、S大学とA大学においては競技レベルと心理的競技能力は一致しなかった。とくにA大学のレギュラー選手の心理的競技能力はS大学のレギュラー選手と比較し「自信」や「作戦能力」などの、バレーボール選手にとって重要と考えられている因子が明らかに高い得点となっていた。その原因についてはA大学では全国レベルの大会経験が5回以上の選手の割合はS大学では大学と比較して多くなっていたことが一要因であると考えられる（表2）。実際に2022年度の公式戦（西日本大学バレーボール選手権大会）においてA大学はS大学と対戦しているが、セットカウント2―1でA大学が勝利している。このように競技レベルとして大きな差がないことが、DIPCA.3の違いがみられなかった要因と考えられた。

4.3 今後の課題

本研究では大学女子バレーボール選手の心理的競技能力と競技レベルを比較したが、その競技レベルの差が明らかなものとはいえなかった。その要因として本研究で対象としたカテゴリーにおける競技レベルの差

に大きな違いがみられなかったことが考えられた。一方で、近年ではプレー事象と心理的競技能力との関係についても検討がなされている。氏原ほか（2024）は、大学女子トップレベルのチームを対象としてアンフォーストエラーと心理的競技能力との関係について詳細な調査を行い、DIPCA.3 の尺度では「予測力」「判断力」「忍耐力」「自信」がアンフォーストエラーを引き起こす可能性があることを報告している。今後プレー事象と心理的競技能力との関係について様々な調査を実施し明らかになると考えられる。

次に本研究では全国大会出場経験が多い選手の心理的競技能力が女性特有のものである可能性が示唆されたが、女性特有の心理的競技能力についてもさらに検討する必要があるのかもしれない。三田ほか（2007）は男女の思考パターンについて比較した結果、女性はチームワークや団結力、協調性が男性と比較して高いことを報告している。このような女子選手特有の思考パターンを指導に活かすことで、心理的競技能力を含む競技力の向上が期待できる。

また心理的競技能力を高めるアプローチも必要である。高橋ほか（2021）は大学男子バレーボール選手を対象に自己分析を中心とした心理セミナーの受講によって DIPCA.3 の成績が向上したとの報告がある。このようなメンタルトレーニングの方法や効果についても今後検討する必要がある。

5. まとめ

本研究は兵庫県内に所在する大学女子バレーボール選手を対象として心理的競技能力調査（DIPCA.3）を実施し、競技レベルが心理的競技能力に及ぼす影響について検討を行った。本研究では全国レベルの大会の経験と心理的競技能力との関係、および競技レベルと心理的競技能力との関係について統計的手法を用いて詳細に分析を行った。なお本研究では競技レベルの比較をするにあたって、チームで所属するリーグを競技レベルとし、選抜チーム＞S 大学（関西学生 1 部リーグ所属）＞A 大学（関西学生 2 部リーグ所属）の順で競技レベルを解釈した。

得られた結果は以下の通りである。

1. 全国大会の出場回数と心理的競技能力との関係については DIPCA.3 の尺度では「自己実現意欲」、「勝利意欲」および「判断力」で、因子では「競技意欲」に有意な差が認められ、全国大会の経験が心理的競技能力を高めていることが推察された。
2. 選抜選手の心理的競技能力は S 大学と比べて明らかに高い項目が散見されたものの、A 大学と S 大学との比較においてはいくつかの項目で A 大学の方が高い心理的競技能力を示し、競技レベルと心理的競技能力が一致しなかった。

以上の結果から、大学女子バレーボール選手の心理的競技能力について一定の知見を得ることができ、今後の大学女子バレーボール選手に対する指導の基礎的資料として活用できると考えられる。

謝辞

本研究の調査にあたって兵庫県内の大学女子バレーボール部の監督の皆様、選手の皆様に多大なご協力をいただきました。記して深く感謝の意を表します。

引用・参考文献

- 1) 本間三和子：シンクロナイズドスイミング日本代表選手の心理的競技能力．水泳水中運動科学，12：1-8，2009.
- 2) 鄭泰應・古川暁也・笹森康平・楠本恭久：大学における卓球選手の心理的競技能力からみた強化と支援.日本体育大学紀要, 44(2)：57-65,2015.
- 3) 檜塚正一・伊達萬里子・田嶋恭江・田中美紀：女子ハンドボール選手の心理的競技能力に関する研究:経験年数および大会参加経験別による比較.武庫川女子大学紀要人文・社会科学編，48:55-62，2001.
- 4) 三田雅敏・伊藤知佳・指宿明星：男女の思考パターンに違いはあるか？：男脳・女脳の分析．東京学芸大学紀要自然科学系，59：37-41，2007.
- 5) 村千尋・下園博信：大学サッカー選手の心理的競技能力について．長崎県立大学論集，36：73-85，2002.
- 6) 西野明：9人制バレーボールにおける国体候補選手の心理的競技能力について．千葉大学教育学部研究紀要．58：183-186，2010.
- 7) 西野明：バレーボールのリーグ戦を通した試合前・中の心理状態の変容．千葉大学教育学部研究紀要，60：197-201，2012.
- 8) 高橋由衣・高井秀明・松井花織・山本健之：自己理解と心理的競技能力との関係: A 大学バレーボール部男子を対象として.日本体育大学紀要，50:3007-3013，2021.
- 9) 高津浩彰・岡本昌也・寺田泰人：ラグビー選手の心理的競技能力について．スポーツ方法学研究，13：102-106，1988.
- 10) 田沼広之・米地徹：ラグビー選手の心理的競技能力に関する研究－男子選手と女子選手の比較－．運動とスポーツの科学，22：47-52，2016.
- 11) 徳永幹雄・橋本公雄：心理的競技能力診断検査（DIPCA.3，中学生?成人用）．株式会社トーヨーフィジカル，2000.
- 12) 徳永幹雄・吉田英治・重枝武司・東健二・稲富勉・斉藤孝：スポーツ選手の心理的競技能力にみられる性差，競技レベル差，種目差．九州大学学術情報リポジトリ，22：109-120，2000.
- 13) 徳永幹雄：T.T 式メンタルトレーニングの進め方（改訂版）動きを直せば，心は変わる，株式会社トーヨーフィジカル出版部，2015.
- 14) 氏原隆・箕輪憲吾・北田豊治・長久保健太郎・西博史：バレーボール競技におけるアンフォーストエラーと心理的競技能力の関係－大学女子選手を対象として－．バレーボール研究，26(1): 14-22，2024.

